
バカとイメージと先導者

ベガF91

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとイメーヂと先導者

【Nコード】

N7506Y

【作者名】

ベガF91

【あらすじ】

PSYクオリアの力でアイチが導かれた世界はバカテスの世界であった。そこで明久と雄二とともに文月学園の学園生活を送ることになる。カードファイト！！ヴァンガードとバカとテストと召喚獣のクロスです。

プロローグ（前書き）

長らくお待たせしました。

予告通りヴァンガードとバカテスのクロスの始まりです。

プロローグ

ヴァンガードファイター、先導アイチはデッキを眺めていた。自分の愛用のロイヤルパラディン。

その時、また幻想を見ることとなる。

「うう……」

目の前にはクレイの世界があった。そして、そこにはアイチの見たこともない世界があった。

（なんだろう……あれ）

その瞬間、光がアイチを包む。

場所は変わって、『文月学園』。保健室のベッドに横たわったアイチは意識を取り戻して目を覚ます。

「こ、ここは……？」

「目覚めたか」

「えっと、あなたは？」

「私は西村宗一。この文月学園の教師だ」

アイチに話しかけているのは文月学園の教師で生活指導の鬼と恐れられ、生徒から鉄人と言われている西村宗一である。

「文月学園……?」

文月学園なんて聞いたことがないアイチは不思議そうな顔をした。そして鉄人に自分の通っている学校を聞いてみることに。

「あの、後江中学校ってご存知ですか?」

「後江中学? 聞いたことがないな」

「えっ!?!」

鉄人の言葉にショックを受けてしまうアイチ。深く考え込んだ結果。

「もしかして、パレルワールド……?」

以前にもカムイが読んでいた漫画のことを思い出す。それはパレルワールドが舞台となっている世界だった。

そして、今自分が平行世界、パレルワールドに来てしまったことを理解した。

「なに?」

鉄人に学園長室に連れてこられ、アイチは文月学園学園長である藤堂カヲルと会う。

「あんたが客人ね。私は藤堂カヲルだ、あんたの名前は？」

「先導アイチです」

「それじゃあ、先導。あんたのことを話してくれるかい？」

「はい」

アイチは自分の世界のことと今大人気のカードゲーム、ヴァンガードのことを話した。今自分が知っているのはこれしかないとためである。

「なるほどね。先導、ひとつ提案あるんだが」

「なんですか？」

カヲルの言葉に息をのむアイチ。

「この文月学園に学生として通って見ないか？」

「僕が……ですか？」

カヲルの言葉に少し不安を感じる。

「嫌なのかい？」

「いえ、僕はまだ中学生ですし」

その言葉にカヲルはふっと笑う。

「別に気にすることないよ。あんたは異世界から来た客人だし。それに行くあてはあるのかい？」

「それは……………」

カヲルの言葉に黙ってしまう。確かに、異世界に来てしまった以上、どこに行けばいいのかわからない。

ここはカヲルの言うとおりにするしかなかった。

「それじゃあ、明日文月学園の編入試験を行うよ。今日は文月学園に泊まって勉強をしたらどうだい？」

「じゃあ、お言葉に甘えて……………」

まだ不安気味なアイチ。すると、鉄人はドアの方へと向かっていった。

「そんなところで何をしている！」

「うわ！」

「ぐお！」

バタッ

鉄人はドアを勢い良く開けて、そこから茶髪に少し女性に見える顔立ちをした少年吉井明久と赤髪に背が高く逞しい体を持つ少年坂本雄二が倒れこんだ。

それを見たアイチもびっくりする。

「な、なに……?」

「この学園のバカどもだよ」

「貴様ら、どこまで聞いていた」

「えっと……」

「全部だ」

鉄人に星座をさせられ、すんなり答える雄二。

「まったくお前らは……」

「あの、これは僕の問題ですし、この2人を責めないでください!」

アイチは2人をフォローした。

「……わかった、もう立っていい」

鉄人の許可を得て、明久と雄二は立ち上がる。

「ありがとう! えっと……先導君だっけ?」

「アイチでいいよ。それと君たちの名前は……」

「僕は吉井明久。よろしくね、アイチ」

「俺は坂本雄二だ。よろしくな、アイチ」

「こちらこそ、明久君、雄二君」

3人は握手を交わす。すると、アイチは鉄人にこんなことを聞いた。

「西村先生、この2人のクラスはどこなんですか？」

「なぜそんなことを聞くんだ？」

「その……、この2人と同じクラスがいいなっと思っただけです」

「「え!?!」」

その言葉に鉄人はアイチに聞く。

「どうしてだ？」

「彼らに僕の秘密を知られてしまいましたし、同じクラスの方がいいと思った上です」

「そうか。しかし、こいつらのクラスはFクラスだぞ」

アイチはそのFクラスのことを鉄人に聞いてみた。

「Fクラスってどんなクラスなんですか？」

「この文月学園は一年生の最後に振り分け試験と言うものを行い、成績別にクラスを振り分けるんだ。成績が優秀な生徒はAクラス。そして、学園最低のバカの生徒達の集まりがFクラスだ。本当にFクラスでいいのか？」

それでもアイチの考えは変わらなかった。

「大丈夫です」

「わかった。吉井！ 坂本！」

「は、はい!?!」

「先導の面倒はお前達が責任を持って見る、いいな!?!」

「イエッサー、鉄人!」

「それと何度も言うが、西村だ!」

明久と雄二が鉄人に敬礼する姿を見たアイチは少し不安そうな目で見ていた。

（大丈夫かな、僕……）

召喚獣と先導者（前書き）

設定は後日書く予定です。

チームQ4や森川たちももちろん出します。

アイチの成績は漫画版を基準としています。

召喚獣と先導者

鉄人とカヲルと一旦分かれ、アイチは明久と雄二にヴァンガードのカードを見せていた。

「これがヴァンガードかあ」

「しかし、見たこともないカードばかりだな」

明久と雄二にとってはヴァンガードを見るのは初めてであった。その後もアイチは自分の愛用デッキのロイヤルパラディンの他にもかげろう、オラクルシンクタンク、ノヴァグラップラ など教えた。

「この世界にはヴァンガードはないの？」

「ああ。それよりアイチ、得意教科はなにかないか？」

「得意教科は……特にないけれども苦手な教科はないかな？」

「なるほどな……。でも、点数によっては『試験召喚戦争』で活躍はしそっだな」

雄二からでてきた『試験召喚戦争』という言葉聞いてアイチははてなを浮かべる。

「ねえ、『試験召喚戦争』ってなに？」

「そっか、アイチは知らないんだっけ？」

「説明してもまだ半分はわからないだろ。明日の編入テストが終われば鉄人に教えてくれるだろうから」

「その、鉄人って西村先生のこと？」

ここでアイチは雄二にどうして鉄人こと、西村のことを鉄人と呼ぶのか聞いてみる。

「そのうちアイチにもわかるさ、それより明日の編入テストは大丈夫か？」

「あ、そうだった」

「わりいな、邪魔しちゃって」

「ううん。大丈夫だよ」

「そんじゃあ明久、そろそろ帰ろうぜ。アイチ、また明日来るからよ」

「アイチ、また明日」

「うん。明久君も雄二君もありがとう」

アイチは明久と雄二に別れの挨拶をすると、鉄人の用意した部屋で勉強をすることにした。

そして用意された参考書を見てみると高校の範囲。さすがのアイチも頭を掲げてしまう。

「日本史と世界史に分けられるんだ。そしてそのほかの教科もまだ習っていないものばかり」

まだ中学3年生のアイチにとっては最大の山場であった。一から習っていないものをやるのは無理があるがそれでもアイチは筆記用具の中からペンを取り出し、参考書を見はじめる。

「でも、今はやるしかないんだ」

翌日のお昼過ぎ、明久と雄二はアイチの様子を見に来た。

「どうだった？」

「ちょっと難しかったけれどなんとか……」

「そうか」

「そろそろ採点も終わっている頃だから行かなきゃ」

そういつて3人は学園長室へと向かった。

学園長室に入ると、カヲルと鉄人が居た。

「あの……」

「先導、これがあなたの成績だよ」

カヲルは成績表をアイチに渡す。明久と雄二も隣で見る。

現代国語：C

古典：C

数学：D

物理：D

化学：C

日本史：A

世界史：A

現代社会：B

英語：C

保健体育：D

「すごいよ！ 平均してもCクラス並みだよ！」

「日本史と世界史が強いな。これは試験召喚獣戦争でも活躍しそっ
だな」

ここで鉄人が三人に話しかける。

「吉井、坂本。これから先導の試験召喚獣の手伝いをしてもらっぞ」

「はい！」

「了解！」

「先導、これからこの文月学園の試験召喚システムを見てもらっ」

「お願いします！」

明久と雄二が対峙し、西村が腕を上げて言う。

「数学、承認！」

西村を中心に特殊なフィールドが展開される。明久と雄二はポ
ズを決めて言い放つ。

「試験召喚獣……試験召喚^{サモン}！！」

明久と雄二の前に、召喚者をデフォルトされた80センチの召喚
獣が現れた。明久の召喚獣は改造学ランに木刀を装備しており、雄
二は改造制服にメリケンサックを装備している。

「これが召喚獣……」

カヲルがニヤリと笑いながら言う。

「そうさ。これが私が開発した化学とオカルトと偶然で完成した『試験召喚システム』さ。試験の点数によって召喚獣の強さが直結するんだよ」

「あの、僕もやってみてもいいですか？」

「ああ、もちろん」

アイチは右手を前に突きだして言う。

「試験召喚獣……試験^{サモン}召喚！！」

起動キーの詠唱でアイチの召喚獣が現れた。けれども、その召喚獣は召喚者であるアイチをデフォルトした姿ではなかった。

「ば、ばーくがる……？」

それはヴァンガードでいつもアイチが^{ファーストヴァンガード}FVとして使われているばーくがるであった。

そして大きさは明久と雄二の召喚獣と同じ80センチで、デフォルトの姿になっている。

「なんでばーくがるが……ってこれは……」

目の前には紋章の上に置かれているばーくがるのカードが一枚あった。しかもその紋章はヴァンガードサークルの紋章であった。

「もしかして……!」

アイチはすぐさまデッキを取りだしシャッフルをして上から5枚引く。その後、山札からカードを一枚ドロし、手札から1枚のカードをばーくがるのカードの上に置く。

「小さな賢者マロンにライド!」

すると、アイチの召喚獣の姿が変わり、マロンの姿となった。それを見た明久と雄二は驚く。

「す、姿が変わった!?!」

「これって昨日言ってたヴァンガード……!?!」

「ソウルのばーくがるはリアガードサークルに移動」

カードをリアガードサークルに移動させると、アイチの召喚獣であるマロンの後ろにはーくがるが出てきた。

さすがのカヲルも驚いてしまう。

「召喚獣が変形したうえ召喚獣が増えた? そんな機能を付けた覚えはないよ!?! それに何故召喚獣の姿が召喚者とは違うんだい!?! 先導、あんた何者だい?」

「えっと……」

試験召喚システムが今までに無いイレギュラーな事態が発生したことにより、カヲルはアイチの存在に疑問を持つ。

さすがにアイチも困った表情を浮かべる。すると鉄人が救済に入

った。

「学園長。先導は今日の編入試験で疲れています。試験召喚システムの事はまた後日にでも」

「……わかったよ。ほら、さっさと出て行きな」

「あんまりアイチを困らせないでよ、ババア」

「それでも教育者かよ、ババア」

「明久君、雄二君……学園長にむかって失礼だよ」

明久と雄二はカヲルに暴言を言い残すと、アイチは注意した。明久と雄二にアイチを連れてさっさと学園長室から出て行く。

その後、明久と雄二はアイチに文月学園を案内していく。そして、誰もいない屋上に着いた。

「そういえば、新学期っていつからなの？」

「来週の4月7日からだよ」

「アイチ、もしかして楽しみなのか？」

「まだ不安なところもあるけれど、どんな生活になるのか楽しみだよ」

アイチはそう答え、明久と雄二の会話が続いた。

新学期と自己紹介（前書き）

そろそろバカテスの10巻がでそうな予感がするけれども……。

今年中には出すとのことですよ。

新学期と自己紹介

4月7日、文月学園の新学期が始まる。編入試験後、アイチはカヲルが用意したマンションに住んでいた。

だが、偶然にも明久と同じマンションで暮らしていた。

「これでよしと」

今日は珍しく早く起き、文月学園の制服に着替え、鞆を持って部屋から出た。するとそこには明久が待っていた。

「アイチ、おはよう」

「おはよう、明久君」

お互い挨拶し、文月学園に向かった。

鉄人からクラス配属の手紙をアイチと明久に渡すが、既に知っているので驚かず、二人はそのまま2年Fクラスに向かう。

Fクラスに入ってみると……

「えつと……」

この光景を見てアイチも声が出ない。

「アイチ、僕達と同じFクラスじゃなくてもっと上のクラスが良かったんじゃない？」

「うっん、せつかく明久君と雄二君という友達ができたのに変えることなんてできないよ」

「アイチ……」

「おっ、来たな。明久、アイチ！」

雄二が2人を出迎えてくれた。すると、そこには見た目が美少女の少年（？）と雰囲気少し暗めの寡黙な少年がいた。

「雄二よ、この男なのか？」

「……………可愛い」

「え!?!」

今一瞬なにか如何わしい言葉が聞こえたが気にしないことにした。

「そうだ。アイチ、この二人は俺と明久のダチだ」

「ワシは木下秀吉じゃ」

「……………土屋康太」

「僕は先導アイチです。よろしく、木下君、土屋君」

すると、アイチの言葉に秀吉は驚き、目尻に涙を浮かべてアイチの手を取って握りしめる。

「アイチよ、お主はワシを男として見てくれるのか!？」

「え? だって、男子の制服着てるんだし……」

「ワシは……ワシは嬉しいのじゃ! 皆の者はワシを男ではなく女扱いしていたのじゃ。アイチ、ワシは今……最高の友と巡り会えたのじゃ!」

「え……なんか初対面でそういわれると恥ずかしいよ……」

「ワシのことは秀吉でいいのじゃ!」

アイチと秀吉が仲良くやっている光景を見て明久と康太はうらやましがっていた。

「いいな」。女の子同士仲良くしちゃって

「……………うらやましい」

「ちょっと! 僕は男だよ!」

明久と康太にツッコミを入れた。

それから続々とFクラスのクラスメイト達が教室に入ってきて、自己紹介が始まる。そんな中、男だらけのFクラスに1人だけ女子がいた。

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど、読み書きが苦手です」

それは少し癖のある髪をポニーテールに纏め、強気な印象がある可愛らしい女子である。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

「えええ!?!」

美波の趣味にびっくりするアイチ。その隣に明久が震えていた。

「た、たぶんふざけてるんだよ。きつと」

「だといんだけど……。下手したら……。三途の川に行くからさ……」

(それはもう人殺しだよ……)

心の中でそう思い、次は明久の出番となった。

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

「それって……」

見てみるとそれは何やら機械のものばかりだった。アイチにはそれがなんなのかわからないため、放っておくことにした。

それから他のクラスメイトの自己紹介が終わると、遅れてFクラス最後の1人が教室に入る。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

ふわりと柔らかいピンク色の髪に、見るからに優しそうな可憐な容姿をした少女だった。

「姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします……」

瑞希は学年二位の成績を持っていて、本来ならAクラスにいけるはずだが、昨年度の振り分け試験で高熱を出してしまい、退席してしまった。

振り分け試験の途中退席は0点扱いとなり、結果、瑞希はFクラスに振り分けられてしまったのだ。

瑞希は席に着くと、そんなみんなのざわめきにアイチが明久に声

をかける。

「なんかみんなざわめいているけど、あの人がかしたの？」

「実は姫路さん、その日……」

瑞希のことについて明久はアイチに全部教えた。それを聞いたアイチは少し哀しそうな顔をした。

「そうなんだ……」

隣を見ると、そこには明久を見つめていた瑞希。アイチが声をかける。

「あの……」

「はわ！」

アイチの視線に気づいた瑞希はあわてて前を向いた。

「?」

その後、担任の先生が教卓を破壊してしまったので替えを取りに教室から出て行った。すると、明久は雄二を連れて廊下に向かった。そして、それから二人は教室に戻り、自己紹介の時間が流れる。最後にFクラスのクラス代表である雄二が前に出る。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

雄二は一拍を置いてゆっくりと告げる。

「さて、皆に一つ聞きたい」

Fクラス全員の視線が雄二に集まる。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが 不満はないか？」

『大ありじゃあ……!!』

二年F組生徒の魂の叫び。この光景にびっくりするアイチ。

(なんかすごいクラス……)

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ! 改善を要求する!』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ? あまりに差が大きすぎる!』

堰を切ったかのように次々とあがる不満の声。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

級友たちの反応に満足したのか、雄二は自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべた。

「これは代表としての提案だが FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7506y/>

バカとイメージと先導者

2011年11月26日23時56分発行